

卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	「ひきこもり」当事者と親を追い詰めるものは何か —元農水事務次官長男殺害事件から読み解く—
氏名	森田歩美
メジャー	社会学
マイナー	心理学
<p>(要旨)</p> <p>本稿では、元農林水産事務次官の父親(当時 76 歳)が、長年ひきこもり状態にあった長男(当時 44 歳)を殺害した事件を取り上げ、この事件において父/息子を追い詰めたものは何だったのか、この事件の背景にどのような社会的な価値観や風潮があるのかについて検討した。</p> <p>まず、長男は、働いていない自分に対する世間の否定的な評価を感じ、強い自己否定感を抱えていたと考えられる。さらに父親の自立を求める言葉が、長男の焦りを駆り立て苦しさを増幅させていたこと、長男はエリートであった父親を尊敬しつつも、父親のようになれない劣等感を抱えていたこと、父親と長男の間で対等に話し合う対話が成り立っておらず、父親は、長男自身が感じていた葛藤や苦しさを受け止めることができていなかった可能性について指摘した。一方、父親は、「ひきこもり」当事者の生活保障を家族が担わねばならない状況において、父親自身が亡くなった後の長男の生活保障の不安があったと思われる。同時に父親は、長男の暴力によって追い詰められていたが、誰にも相談しておらず助けを求めることができなかった。その理由としては、「ひきこもり」を恥だとする価値観、親の責任を強く求め、家庭の問題は自分で解決しなければならないという家族主義的な社会のあり方、自己責任の価値観が社会に蔓延していることが考えられる。</p> <p>この事件の数日前にも「ひきこもり」と犯罪・事件を結び付ける報道が繰り返されていたように、日本社会には「ひきこもり」を悪とする価値観、否定的に捉える価値観がある。当事者と家族は世の中の「ひきこもり」に対する批判的なまなざしを強く意識している。当事者は「ひきこもり」に対する否定的な評価を気にし、それから逃れるためにひきこもっている。また親も恥の意識から支援を求めることができず孤立してしまう。この事件においても、父親と長男は「ひきこもり」に対する批判的な社会の価値観、風潮のあり方を強く受けていたことが考えられる。これらが彼らを追い詰めた大きな要因の一つであるだろう。</p> <p>これらの知見を踏まえながら、最後には、ひきこもりとその家族のついての支援についての提案を行った。誰にも頼らず、家族内で問題を解決しようとするのではなく、本人や家族の一人一人のニーズを探り、包括的な支援を行っていくことで、孤立を防ぎつつ家族全体を支える支援が必要である。当事者とその家族が社会の中で孤立することなく、支援と繋がりながら、尊厳や主体性、自尊感情を回復しながら、少しずつ自身の将来のことを考えていけるようになることが目指される。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本稿では、元農林水産事務次官の長男殺害事件を取り上げ、日本における「ひきこもり」問題について検討している。事件当時の新聞報道や関連する先行研究を交え、「ひきこもり」の当事者とその家族が直面している現実を中立的な立場から丁寧に分析し、支援策を模索している点を評価し、優秀論文として推薦する。</p>	